

## 『石清水物語』第三系統伝本の成立に関する一考察 ： 附・石水博物館蔵本の位置付け

宮崎，裕子  
九州産業大学国際文化学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/1909876>

---

出版情報：語文研究. 122, pp.1-17, 2016-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 『石清水物語』第三系統伝本の成立に関する一考察

— 附・石水博物館蔵本の位置付け —

宮 崎 裕 子

## 一 はじめに

鎌倉時代の成立と推定される『石清水物語』は、「擬古物語」あるいは「中世王朝物語」と呼ばれる作り物語の一つであり、近世期以降に書写された三〇本近くの写本が伝わっている。これらの伝本は、その内の一七本を調査された桑原博史氏によって四系統に分類された。<sup>(注1)</sup> その分類に従って、近世期に成立した、あるいは近世期に成立した可能性が高い二六本の伝本を整理すると次のようになる。<sup>(注2)</sup>

### 【第一系統】

岡山大学附属図書館池田家文庫蔵本（二六八九年）・名古屋  
市蓬左文庫蔵本（二六九二年までに成立）・大阪府立中之島  
図書館蔵本（二八二八年）・京都大学文学研究科蔵本・尊経  
閣文庫蔵本・飛騨高山まちの博物館蔵本（田中大秀旧蔵本）  
新潟大学佐野文庫蔵本（加藤千蔭旧蔵本）・静嘉堂文庫蔵  
本（和学講談所旧蔵本）

### 【第二系統】

神宮文庫蔵本（二七八四年）・内閣文庫蔵一冊本・彰考館  
文庫蔵本

### 【第三系統】

一類 本居宣長記念館蔵本（二七九四年）・射和文庫蔵本・

国立国会図書館蔵本・東京大学文学部国文学研

※伝本の書写年が判明している場合は、（ ）内に西暦で記した。

※本稿で主に取りあげる四本は、太字で示した。

究室蔵本・刈谷市立図書館村上文庫蔵本・無窮  
會図書館蔵本・大阪府立中之島図書館蔵本

二類 筑波大学附属図書館蔵箱入り本

三類 金沢大学附属図書館蔵本・筑波大学附属図書館  
蔵本・内閣文庫蔵本

四類 石水博物館蔵本（一八二六年）・竹柏園旧蔵本（一  
八四四年）

五類 国文学研究資料館鶴飼文庫蔵零本（二七九五年）

#### 【第四系統】

天理大学附属図書館蔵本

一瞥して明らかのように、四つの系統の中で最も伝本数が  
多いのは第三系統で、同系統に属する伝本の大きな特徴の一  
つとしては、題号がすべて『正三位物語』となっていること  
が挙げられる。また、一〜三類に分類される伝本はすべて、

正三位物かたり柴田常昭か本をかりてうつさせたる一か  
へりよみあはせした、しつ

寛政六年八月十一日 本居宣長

と記した奥書を持ち、宣長の所持本であった本居宣長記念館  
蔵本から派生したものであることが判明している。さらに、  
五類本の奥書にも、荒木田麗女が宣長所持本を借りて転写し

たものである旨が記されている。

この第三系統伝本の成立については、桑原氏が、

(1) 祖本は第二系統伝本である。

(2) すべての伝本は宣長所有の本から派生したものである。

という見解を提示された。<sup>注1</sup>

しかし、稿者による検証の過程で、第三系統伝本の本文は  
第二系統伝本よりも第一系統伝本のそれに近いこと、更に、  
第三系統第四類本である石水博物館蔵本と同本を転写した竹  
柏園旧蔵本は、本居宣長記念館蔵本を経ずに成立した伝本で  
あることが明らかになった。

本稿は、こうした検証の結果を踏まえ、第三系統伝本の祖  
本、及び、第三系統内における石水博物館蔵本の位置付けに  
ついて検討するものである。

## 二 桑原氏の分類方法

まず、第三系統伝本の祖本について検討する前に、桑原氏  
が『石清水物語』諸伝本を四系統に分けた際の分類方法を確  
認しておく。

桑原氏は、『石清水物語』の伝本間には本文異同が少ないこ  
とを指摘した上で、改変箇所がある天理大学附属図書館蔵本

(第四系統)を除く諸本を、本文中の分割点の有無によって、第一〜第三系統に分類された。<sup>(注5)</sup>

本文上にさしたる異同がないという点では、第一系統の本についても(引用者注…第三系統と)同様である。ただ第一系統と第二、三系統とは、形態が少しことなる。すなわち第一系統の本では、二冊本のそれぞれがさらに内部で二つにわかれている京大本のかたち——四冊本であつたかと思われる形態が本来であつて、以下は下冊あるいは上冊にのみそのわかれ目を保持して行つたとおぼしい。これに対し、第二、三系統の本では便宜的に四分割のかたちをとるものが、二、三あるけれども、本来は二冊本なのであつた。

桑原氏の御指摘通り、京都大学文学研究科蔵本には上下冊ともに、「わかれ目」を意味すると思われる空白箇所がある。その「わかれ目」及び上下冊の冒頭部を以下に示す。

上冊冒頭 此比の左大臣ときこゆるは(五頁)  
上冊四四丁裏 うせにしひたちのかみか子は(四一頁)  
下冊冒頭 五せちりんしのまつりなと(八一頁)  
下冊五〇丁裏 かの人しれぬ心ひとつは(一二四頁)

※( )内は『鎌倉時代物語集成』の該当頁。

この分割点を基準にした分類方法に従つて第一〜第三系統伝本の特徴を整理すると、次のようになる。

(1) 第一系統

◇本文中に分割点がある。

① 京都大学文学研究科蔵本上下冊と同じ分割点あり

岡山大学附属図書館池田家文庫蔵本・飛騨高山まちの博物館蔵本

② 京都大学文学研究科蔵本上冊と同じ分割点あり

尊経閣文庫蔵本

③ 京都大学文学研究科蔵本下冊と同じ分割点あり

名古屋市蓬左文庫蔵本・大阪府立中之島図書館蔵本・新潟大学佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本

(2) 第二系統

◇本文中に、第一系統に見られる分割点がない。

◇上下冊の分冊箇所は京都大学文学研究科蔵本と同じ。

(3) 第三系統

◇本文中に、第一系統に見られる分割点がない。

◇上下冊の分冊箇所は京都大学文学研究科蔵本と同じ。

◇題号が『正三位物語』となつてゐる。

桑原氏は、本文中に分割点を有する、つまり、「本来」の「形態」をとどめていると思われる伝本を第一系統と位置付け、さらに、分割点を持たず、題号が『正三位物語』となっているものを第三系統とし、その他を第二系統とされたのであろう。第二系統と第三系統との関係については、

彼（引用者注・本居宣長）の手を経た本から派生した第三系統の本は、外題がすべて正三位物語となつており、しかも彼の手を経たことによつて一八世紀以降、もつとも広く流布したようである。彼がこの物語を手にする機縁となつた柴田道昭所持本は、第二系統の本であつたらしい。第二系統の本がほそぼそと流布していて、その中の一本が柴田道昭から本居宣長へとつたわつたのであつた。両系統本には、転写上のあやまりのほか本文にはさしたる異同がない。ただ「——カ」という注記が加わり、物語の題名がかわつたにすぎない。<sup>(注6)</sup>

と述べられただけで、第二系統が第三系統の祖本であると判断した根拠は示されていない。おそらく、第一系統特有の分割点が第三系統には存在しないことから、分割点のない第二系統を祖本と想定されたのではないだろうか。

しかしながら、実際に第三系統伝本と第一・二系統伝本の本文を比較したところ、第三系統伝本の本文は第二系統より

も第一系統に近いものであることが判明した。次節では、第三系統伝本と第一系統伝本の本文を比較し、第三系統と近い本文を持つ第一系統伝本を特定する。

### 三 第三系統伝本の祖本

言うまでもなく、ある系統の祖本を特定する際に重要な手がかりとなるのは、両者に共通する異文あるいは脱文の存在である。

『石清水物語』第三系統伝本の場合、その祖本、もしくは祖本に近い伝本を特定する重要な手がかりとなり得るのは、同系統及び第一系統伝本の脱文であり、それは、第三系統に四箇所、第一系統に一箇所存在する。

本節では、これら計五箇所の脱文を各伝本の当該本文<sup>(注7)</sup>と比較し、異同を確認する。なお、ここで比較対象となる脱文等は第三系統伝本のすべてに共通するものであるため、同系統については本居宣長記念館蔵本の本文のみを掲げる。また、参考資料として、第二系統に属する神宮文庫蔵本・内閣文庫蔵一冊本の当該本文も併記した。

※諸本の略称は次の通り

【宣】 本居宣長記念館蔵本 【佐】 新潟大学佐野文庫蔵本

【静】 静嘉堂文庫蔵本 【蓬】 名古屋市蓬左文庫蔵本

【京】 京都大学文学研究科蔵本 【尊】 尊経閣文庫蔵本

【池】 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵本

【高】 飛騨高山まちの博物館蔵本

【神】 神宮文庫蔵本 【内】 内閣文庫蔵一冊本

※本文の補入箇所は「○」、見消は「<sup>△</sup>」のように示した。

(1) 【宣】 よかはの何かしの僧都けんある人にてあるをむかへよ

せて【脱文】おとろくしき ことあらはれす(上冊一九ウ

一一行〜二〇オ一行)

◇第一系統伝本

【佐】 よかはの何かしのそうつけんある人にてあるをむかへよ

せて【脱文】おとろくしきことあらはれす

【静】 よかはの何かしのそうつけんある人にてあるをむかへよ

せて【脱文】おとろくしきことあらはれす

【蓬】 よかはのなにかしのそうつけんある人にてあるをむかへ

よせてかちまいる御物つきすへて物わたしなとすれとさ

しておとろく敷事あらはれす

【京】 よかはの何かしのそうつけんある人にてあるをむかへよ

せてかちまいる御物つきすへて物わたしなとすれとさし

ておとろくしきことあらはれす

【尊】 横川の何かしの僧都けんある人にてあるをむかひよせて  
かち参り御物つきすへて物わたしなとすれとさしておと  
ろくけしきにもあらはれす

【池】 よかはのなにかしのそうつけんある人にてあるをむかへ  
よせてかちまいる御物つきすへて物わたしなとすれとさ  
しておとろくけしきにもあらはれす

【高】 よかはのなにかしのそうつけんある人にてあるをむかへ  
よせてかちまいる御物つきすへて物わたしなとすれとさ  
しておとろくけしきにもあらはれす

◇第二系統伝本

【神】 よかはのなにかしのそうつけんある人にてあるをむかへ  
よせてかちまいる御ものつきすへてもわたしなとすれ  
とさしておとろくしき事あらはれす

【内】 横川の何かしの僧都けんある人にてあるをむかへよせて  
加持参り御物つきすへてもわたしなとすれとさしてお  
とろくしき事顕れす

(2) 【宣】 やをらあゆみよれば【脱文】ひやうふをたてふたきた  
るうちへいれて(上冊三九オ八〜九行)

◇第一系統伝本

【佐】 やをらあゆみよれば **脱文** ひやうふをたてふたきたる  
うちへいれて

【静】 やをらあゆみよれば **脱文** ひやうふをたてふたきたる  
うちへいれて

【蓬】 やをらあゆみよればをき物ので〇そくたて、あそひの〇  
もをきたる所にひやうふをたてふたきたるうちへいれて

【京】 やをらあゆみよればをき物のでうとたて、あそひのくと  
もをきたる所にひやうふをたてふきたるうちへいれて

【尊】 やをらあゆみよればをき物のでうとたて、あそひのくと  
もをきたる所に屏風をたてふたきたるうちへいれて

【池】 やをらあゆみよればをき物のでうとたて、あそひのくと  
もをきたる所にひやうふをたてふたきたるうちへいれて

【高】 やをらあゆみよればをき物のでうとたて、あそひのくと  
もをきたる所にひやうふをたてふたきたるうちへいれて

◇第二系統伝本

【神】 やをらあゆみよればおきもの、てうと立てあそひのくと  
もをきたるところにひやうふをたてふたきたるうちへい  
れて

【内】 やをらあゆみよれば置物の調度立てあそひの具とも置た  
る所に屏風をたてふたきたる内へいれて

(3) 【宣】 又今更 **脱文** ことに御心さし深かりしかは(上冊四

二ウ六〜七行)

◇第一系統伝本

【佐】 又いまさら **脱文** ことに御心さしふか、りしかは

【静】 又いまさら **脱文** ことに御心さしふか、りしかは

【蓬】 またさらなる御心のうちともなりおなしなけきといひな  
がらことに御心さしふか、りしかは

【京】 又さらなる御心のうちともなりおなしなけきといひな  
らことに御心さしふか、りしかは

【尊】 又さらぬ御心のうちともなりおなしなけきといひな  
ことに御心さしふか、りしかは

【池】 又さらなる御心のうちともなりおなしなけきといひな  
らことに御心さしふか、りしかは

【高】 又さらなる御心のうちともなりおなしなけきといひな  
らことに御心さしふか、りしかは

◇第二系統伝本

【神】 又いまさらなる御心のうちともなりおなしなけきといひ  
なからことに御こ、ろふか、りしかは

【内】 又今更なる御心の中どももおなじ歎といひなから殊に御  
心深かりしかば

(4) 【宣】<sup>余</sup> 所にてのみるめ 脱文 なくあはれになつかしけれ  
(上冊六一ウ一二〜六二オ一行)

◇第一系統伝本

【佐】 よそにてのみるめ 脱文 なくあはれになつかしけれ

【静】 よそにてのみるめ 脱文 なくあはれになつかしけれ

【蓬】 よそにての見るめはさる事にてけちかきけしきこそ猶い  
ふよしもなくあはれになつかしけれ

【京】 よそにての見るめはさる事にてけちかきけしきこそな  
をいふよしもなくあはれになつかしけれ

【尊】 余所にてのみるめはさる事にてけちかきけしきこそな  
をいふよしもなくあはれになつかしけれ

【池】 よそにてのみるめはさる事にてけちかきけしきこそ猶  
いふよしもなくあはれになつかしけれ

【高】 よそにてのみるめはさる事にてけちかきけしきこそ猶  
いふよしもなくあはれになつかしけれ

◇第二系統伝本

【神】 よそにてのみるめはさる事にてけちかきけしきこそなを  
いふよしもなくあはれになつかしけれ

【内】 よそにての見るめはさる事にて気近きけしきこそ猶いふ  
よしもなく哀になつかしけれ

(5) 【宣】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかりぬへし  
にふめる色にやつれ給へるしもかくてこそ光 はそふ物な  
りけれ (上冊四三オ七〜九行)

◇第一系統伝本

【佐】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかりぬへしに  
ふめる色にやつれ給へるしもかくてこそひかり はそふ

物なりけれ

【静】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかりぬへしに  
ふめる色にやつれ給へるしもかくてこそひかり はそふ

物なりけれ

【京】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかり  
そふ物也けれ 脱文 は

【尊】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかり  
そふ物なりけれ 脱文 け

【池】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかり  
なりけれ 脱文 け

【高】 おほろけならん人ならひきこえんはまはゆかり  
なりけれ 脱文 け



◇第二系統伝本

【神】おほろけならん人ならんひきこえんはまはゆかりぬへしに  
ふめる色にやつれ給へるしもかくてこそひかりはそふ  
ものなりけれ

【内】朧気ならん人并ひ聞えんはまはゆかりぬへしにふめる色  
にやつれ給へるしもかくてこそ光はそふ物成けれ

\*

以上を確認すると、第三系統伝本の脱文箇所(1)～(4)は、すべて新潟大学佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本の脱文箇所と一致しており、新潟大学佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本を除く第一系統伝本に共通の脱文(5)は、第三系統伝本には見られない。したがって、第三系統に近似する本文を持つ伝本は新潟大学佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本の二本に絞られる。

四 新潟大学佐野文庫蔵本と

静嘉堂文庫蔵本との比較

新潟大学佐野文庫蔵本(以下「佐野文庫蔵本」と静嘉堂文庫蔵本の本文を詳細に比較したところ、両者は酷似しており、

各丁の配字配行まで一致していた。使用されている仮名の字母が異なる箇所もあり、直接の書写関係の有無は明らかではないが、少なくとも、共通の祖本を忠実に書写して成立したものと考えられる。

では、この二つの伝本のいずれが、第三系統により近い本文を持つのか。それを確認するため、佐野文庫蔵本と静嘉堂文庫蔵本の異同箇所を本居宣長記念館蔵本の当該本文と照合した。その結果を整理したのが、次の表1・2である。

※佐野文庫蔵本及び静嘉堂文庫蔵本に施された傍書・見消・本文訂正の類については、書き入れられた時期を特定できないため、本居宣長記念館蔵本との異同と関連性が高いもの以外は挙げなかった。

※太字で示しているのは、佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本の異同箇所と本居宣長記念館蔵本の該当本文とが一致、あるいは、近似している部分である。

※佐野文庫蔵本と静嘉堂文庫蔵本の丁数にずれが生じているのは、佐野文庫蔵本に四丁分に相当する重複があることによる。

※文字が消されている箇所は「●」で示した。

※書き入れの墨書・朱書の別は、煩雑になるため、特に注記しなかった。

【表1】 佐野文庫蔵本の本文と本居宣長記念館蔵本の本文とが  
一致（近似）する箇所

うへたのほられす	95オ7	うへものほられす	95オ7	うへたのほられす	62オ1	佐野文庫蔵本	丁・行	静嘉堂文庫蔵本	丁・行	本居宣長記念館蔵本	丁・行
うらめしきはなと	78ウ7	うらめしきはなと	78ウ7	うらめしきはなと	51ウ5	（上冊）					
涙のみ所せきに	52オ3	涙のみ所せきに	52オ3	涙のみ所せきに	34オ4						
出たてまつり	31オ7	入たてまつり	31オ7	出奉り	20ウ9						
けしきのほかなれと	30オ6	けしきのほかなれと	30オ6	けしきの外なれと	20オ5						
せかいふらうこ女	19ウ3	せかいふらうこ女	19ウ3	せかいふらうこ女	13オ2						
におひやかに	4オ4	におひやかに	4オ4	におひやかに	3オ5						
御なからへにて	1ウ9	御なからいにて	1ウ9	御なからへにて	1ウ5						
（下冊）											
あらめ	103ウ5	あらむ	99ウ5	あらめ	72オ3						
ためらひやらぬ	41オ5	ためらひやみぬ	38オ5	ためらひやらぬ	28オ9						

【表2】 静嘉堂文庫蔵本の本文と本居宣長記念館蔵本の本文と  
が一致（近似）する箇所

心ちもて	42ウ2	心ちして	39ウ2	心ちして	29オ8	佐野文庫蔵本	丁・行	静嘉堂文庫蔵本	丁・行	本居宣長記念館蔵本	丁・行
おいらて	36ウ6	おいゆて	33ウ6	おひいて	25オ5	（上冊）					
さりまりて	34ウ5	さたまりて	31ウ5	御たまりて	23ウ4						
おほする	22ウ7	おほする	20ウ7	おほする	15オ7						
おはすれと	12オ8	おはすれば	12オ8	おはすれば	9ウ6						
にこん	6ウ9	わこん	6ウ9	わこん	5オ10						
おきなく	6オ7	おさなく	6オ7	おさなく	4ウ11						
おとこまでも	5オ9	おとこにても	5オ9	おとこにても	4オ6						
くゑんし	4ウ9	くゑんし	4ウ9	くゑんし	4オ3						
物思む	2オ7	物思ひ	2オ7	物思ひ	2オ1						
かたちあはせん	2オ1	かたりあはせん	2オ1	かたりあはせん	1ウ12						

ひ	とあつかひ	下にし	下へきを	えこそ	をくれ	〈下冊〉	ほれかゝれる	せかひ	あまて	かちき	御つら	まめくしり	みからし
24ウ1	24オ3	16オ8	8オ4	5ウ4	5オ5		92オ6	88オ10	49ウ1	48オ10	47オ6	47オ1	42ウ5
ひ*	みあつかひ	下にし	下へきを	えこそ	をくれ		こほれかゝれる	せかい	あまて	うちき	御つし	まめくしり	みかうし
24ウ1	24オ3	16オ8	8オ4	5ウ4	5オ5		88オ6	84オ10	46ウ1	45オ10	44オ6	44オ1	39ウ5
ひ*	みあつかひ	下りにし	下へきを	えこそ	おくれ		こほれかゝれる	せかい	あさて	うちき	御つし	まめくしり	みかうし
16オ8	16オ2	10ウ12	5ウ8	4オ5	3ウ11		63ウ4	60ウ12	34オ9	33ウ2	32ウ5	32ウ1	29オ11

表1・2を集計すると、佐野文庫蔵本と静嘉堂文庫蔵本との異同箇所の内、本居宣長記念館蔵本の当該本文と一致する、あるいは近似するのは、佐野文庫蔵本が10箇所、静嘉堂文庫蔵本が29箇所であった。よって、第三系統に最も近い本文を持つ第一系統伝本は、静嘉堂文庫蔵本であることが判明した。

ただし、本居宣長記念館蔵本の本文には、佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本よりも、第一系統に属する他の伝本に近い箇所も存在するため、第三系統の祖本となったのは、静嘉堂文庫蔵本そのものではなく、同本や佐野文庫蔵本と関わりの深

\*

身のうきを	みすかに	いかげなき	かたつかさ	かく●つかしけに ※「も」を消している
94オ1	86オ9	85ウ2	57ウ10	25オ2
身のうさを	みそかに	いかげなき	かたつかさ	かくはつかしけに
94オ1	86オ9	85ウ2	57ウ10	25オ2
身のうさを	みそかに	いはげなき	かたつかさ	かくはつかしけに
61オ5	56オ12	55ウ12	38オ1	16ウ5

い伝本であったと考えられる。

## 五 石水博物館蔵本の位置付け

『石清水物語』第三系統伝本には珍しく、宣長の奥書を持たない石水博物館蔵本は、本居春庭・大平に師事した足代（度会）弘訓が、宣長の高弟であった青木（向井）茂房所有の本を書写したものである。宣長の奥書こそないものの、本居宣長記念館蔵本と配字配行や字母にかなりの一致が見え、共通誤謬もあることから、両本の祖本は共通のものであると考えられる。なお、石水博物館蔵本の名は、『国書総目録』『古典籍総合目録』も含めて、刊行された目録類に記載されておらず、その存在を広く知られてはいなかった伝本である。

前述のように、桑原氏は、『石清水物語』の第三系統伝本はすべて宣長所持本を経て派生したとの見解を示された。しかし、桑原氏の前掲書には宣長の奥書を持たない石水博物館蔵本に関する言及がなく、また、同本を転写した竹柏園旧蔵本については「未調査である」と記されているため、氏の見解は宣長の奥書を持つ伝本のみを調査した結果に基づくものと考えられる。

そこで、第三系統内における石水博物館蔵本の位置付けを

明らかにするため、同本と本居宣長記念館蔵本との異同箇所を、第三系統の祖本に極めて近い本文を持つ可能性が高い静嘉堂文庫蔵本の当該本文と比較し、その結果を次の表3・4にまとめた。なお、単なる誤写によって生じたと考えられる異同は挙げず、有意な異同と判断した箇所のみを比較対象として記載している。

※太字で示しているのは、本居宣長記念館蔵本・石水博物館蔵本の異同箇所と静嘉堂文庫蔵本の該当本文とが一致、あるいは、近似している部分である。

※書き入れの墨書・朱書の別は、煩雑になるため、特に注記しなかった。

【表3】 本居宣長記念館蔵本の本文と静嘉堂文庫蔵本の本文とが一致（近似）する箇所

（上冊）	本居宣長記念館蔵本	石水博物館蔵本	静嘉堂文庫蔵本	丁・行
みたれにか	3ウ11	みたれに	3ウ11	みたれにか
はれなから	44オ11	はれなら	44オ11	我なから
				61オ3

うき事のみ	うつ、とも	人も、らさし	かたみ	あなつらはしからす	有て・	に 女二の宮ははるか	ゐ給ふて
53ウ11	51オ10	49ウ9	40オ12	33オ7	32ウ6	1オ12	63オ12
うき事そ	うつ、と	人にもらさし	かたみ <small>カ</small> ・たみ	あなつらしからす	有ても	女二の宮ははるかに	ゐ給ひて
53ウ11	51オ10	49ウ9	40オ12	33オ7	32ウ6	1オ12	63オ12
うき事のみ	うつ、とも	人ももらさし	かたみ	あなつらはしからす	ありて・	に 女二の宮ははるか	ゐ給ふて
82オ8	78オ8	76オ2	61ウ3	50ウ6	49ウ8	1ウ3	88オ1

【表4】一石水博物館蔵本の本文と静嘉堂文庫蔵本の本文とが一致（近似）する箇所

かすかならて	（上冊）	本居宣長記念館蔵本	丁・行
19オ12		石水博物館蔵本	丁・行
かすかならてそ		静嘉堂文庫蔵本	丁・行
19オ12		丁・行	丁・行
かすかならてそ		丁・行	丁・行
25ウ10		丁・行	丁・行

ならひ	人をおとろかして	けに	給て	みたれまつらん	心なり	たのもしけなる	たのみなく	いたく	ふみつたへむ	何かくるしう	おひいて	さはりおほのみにて	かひなく
56ウ7	55ウ4	54オ1	52ウ2	51オ12	47オ8	42オ1	36ウ1	33ウ1	31ウ3	25ウ5	25オ5	22ウ10	22オ7
みならひ	今そ人をおとろかして	むけに	給てし	みたてまつらん	心なりけり <small>心</small>	たのもしけなるも	いとゝたのみなく	いたくも	ふみはつたへん	何かはくるしう	おひ <small>ひ</small> ちて	さはり <small>まほ</small> のみにて	かひなくや
56ウ7	55ウ4	54オ1	52ウ2	51オ12	47オ8	42オ1	36ウ1	33ウ1	31ウ3	25ウ5	25オ5	22ウ10	22オ7
みならひ	いまそ人をおとろかして	むけに	給てし	みたてまつらん	心なりけり	たのもしけなるも	いとゝたのみなく	いたくも	ふみはつたへん	なにかはくるしう	おひ <small>い</small> ちて	さはり <small>く</small> おほのみにて	かひなくや
78ウ1	76ウ8	74ウ4	72ウ4	71オ4	65オ7	57オ10	49ウ1	45オ9	42ウ4	34ウ2	33ウ6	30ウ3	29ウ7

しほれたれば	いのられ給ふ	さも侍らす	者	そ、きあひたる	御まへは	はしめ	御ことは	〈下冊〉	おほしたつとも	御てうとなど	世のことを	むかへきとん <small>しん</small>	た、今
15オ9	14ウ4	7オ3	3ウ9	3オ4	1ウ12	1ウ6	1ウ1		67ウ1	65ウ4	64ウ8	60オ9	57ウ2
しほれたる <small>初</small> れば	いのらせられ給ふ	いまたさも侍らす	者も	そ、きあひたるも	御まへには	はしめて	御こととは		おほしたつとも	御てうとなどは	世のことをも	むかへきこえん	た、今は
15オ9	14ウ4	7オ3	3ウ9	3オ4	1ウ12	1ウ6	1ウ1		67ウ1	65ウ4	64ウ8	60オ9	57ウ2
しほれたるれば	いのらせられ給ふ	いまたさも侍らす	物も	そ、きあひたるも	御まへには	はしめて	御事とは		おほしたつとも	御てうとなどは	世のことをも	むかへきこえん	た、今は
23オ3	22オ2	20オ8	5オ4	4オ2	2オ7	1ウ10	1ウ3		93ウ3	91オ4	89ウ9	83ウ3	79ウ2

かきりてと	うけて	うつし	ことも	我にて	御参りの	ひしめきも	またの日	目あはせん	めぐり	なれと	ならんと	あたら物を	うときを
27ウ8	26オ10	26オ3	26オ2	24ウ2	24オ4	23ウ8	23ウ5	21ウ6	17ウ9	17ウ1	17オ4	16ウ10	16オ10
かきり・と	うけても	うしつらし	ことにも	我にてたに	御参り	ひしめきにも	又の日も	目みあはせん	立めくり	など	ならんとは	あたら物なほ	うときをは
27ウ8	26オ10	26オ3	26オ2	24ウ2	24オ4	23ウ8	23ウ5	21ウ6	17ウ9	17ウ1	17オ4	16ウ10	16オ10
かきり・と	うけても	うしつらし	事にも	我にてたに	御参り	ひしめきにも	又の日も	めみあはせん	立めくり	など	ならんとは	あたら物なを	うときをは
42オ1	39ウ7	39オ9	39オ7	37オ5	36ウ2	36オ1	35ウ7	32ウ5	26ウ7	26オ7	25ウ6	25オ8	24ウ3

いかて	いふ	・	申たれは	人を	六月に	みゆる	しるへ	おもくしても	まことや	うしろめき	かさなりたる	ゆなと	あさましき
51ウ12	50オ7	49ウ3	45オ11	42ウ10	39ウ5	38ウ5	38オ12	33オ7	31オ1	30オ10	29ウ9	28オ11	27ウ9
いかてか	いふも	又	申たりければ	人をこそ	六月より	みゆるは	しる人は	おもくしくて	まことにや	うしろめたき	かさなり多かる <small>オホ</small>	かゆなと	あさかるましき
51ウ12	50オ7	49ウ3	45オ11	42ウ10	39ウ5	38ウ5	38オ12	33オ7	31オ1	30オ10	29ウ9	28オ11	27ウ9
いかてか	いふも	又	申たりければ	人をこそ	六月より	みゆるは	しる人は	おもくしくて	まことにや	うしろめたき	かさなりおほかる	御かゆなと	あさかるましき
79オ6	76ウ3	75ウ4	69オ10	65オ10	60オ10	58ウ10	58ウ4	50ウ6	47オ1	46オ2	45オ5	42ウ10	42オ2

むなしからさるへ けん	さはまざりぬる事	みまや鬼君	すまい	たへ	侍らんこと	有かたさ
62ウ2	58ウ5	58オ12	53ウ7	53オ8	53オ2	53オ1
むなしからさりけ ん	きはまりぬる事	みまやの鬼黒	御すまゐ	たかへ	侍らん・と	ありかたさは
62ウ2	58ウ5	58オ12	53ウ7	53オ8	53オ2	53オ1
むなしからさりけ ん	きはまりぬる事	みまやのおにくろ	御すまゐ	たかへ	侍らん・と	ありかたさは
96オ2	90オ2	89ウ5	82オ2	81オ9	81オ2	80ウ10

\*

表3・4の対照により判明したのは、以下の二点である。

(1) 本居宣長記念館蔵本と石水博物館蔵本の、有意と見なされる異同箇所の内、静嘉堂文庫蔵本の当該本文と一致する、あるいは近似するのは、本居宣長記念館蔵本が一〇箇所、石水博物館蔵本が六三箇所であった。

(2) 本居宣長記念館蔵本の本文には、静嘉堂文庫蔵本・石水

博物館蔵本に比して明らかに多くの誤脱が見受けられる。

この結果は、本居宣長記念館蔵本よりも、石水博物館蔵本の方が祖本の系統である静嘉堂文庫蔵本に近い本文を持つことを明確に示しており、石水博物館蔵本が本居宣長記念館蔵本を経ずに成立した伝本だということを証明するものである。したがって、第三系統伝本は、本居宣長記念館蔵本と同本を経て成立した一・二・三・五類本、石水博物館蔵本とその転写本からなる四類本の二つに大別されることになる。

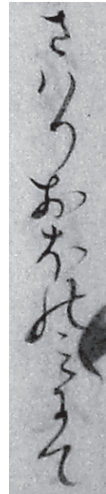
従来、第三系統伝本はすべて宣長が所有していた本から派生したという桑原氏の説を承けて、同系統の善本は宣長所持本だと考えられてきた。<sup>(注9)</sup>しかし、前記(1)(2)のように、本居宣長記念館蔵本よりも、石水博物館蔵本の本文の方が祖本の系統に近く、誤脱も少ないことから、石水博物館蔵本こそが第三系統の最善本であると言えよう。

## 六 柴田常昭所持本と青木茂房所持本について

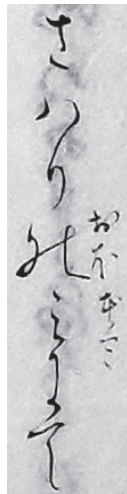
なお、本居宣長記念館蔵本の親本である柴田常昭所持本と石水博物館蔵本の親本である青木茂房所持本とが同一のものであった可能性は、低いと考えられる。その根拠の一つとし

て挙げられるのが、次に示す本居宣長記念館蔵本と石水博物館蔵本との異同箇所である。

本居宣長記念館蔵本（上冊二二丁ウ一〇行）



石水博物館蔵本（上冊二二丁ウ一〇行）



両本とも、右に掲げた本文を不審箇所として扱っており、本居宣長記念館蔵本では「のみ」の横に不審紙が貼られ、石水博物館蔵本は「のみ」に「本ノマ、」と傍書を施している。本来ならば「さはりおほくて」とあるべき箇所だが、ここで注目すべきなのは、石水博物館蔵本の傍書であろう。この傍書によって、青木茂房所持本の当該本文が「さはりのみに」となっていたことが裏付けられる。



これに対して、本居宣長記念館蔵本の当該箇所には不審紙が貼られているのみである。他の不審箇所には「本ノマ、」と書き入れた例も見受けられるため、本文に不審な点を見出せば宣長は、それが誤写によつて生じたものなのかどうかを、親本である柴田常昭所持本と比較して確認したのではないだろうか。青木茂房が宣長門下に入ったのは寛政九年で、柴田常昭はその前年に没しているが、仮に何らかの事情で柴田常昭所持本が青木茂房の手に渡つたのだとすれば、宣長には「さほりのみにて」という青木茂房所持本の本文を目にする機会が十分にあつたはずである。にもかかわらず、本居宣長記念館蔵本の当該箇所に親本の本文形態に関する書き入れがなされていまいという事実は、柴田常昭所持本の本文も「さほりおほのみにて」であつた可能性が高いことを示唆していよう。

したがって、柴田常昭所持本と青木茂房所持本は同一のものではなく、個別の伝本として存在していたと判断するのが妥当であろう。

## 七 おわりに

以上、『石清水物語』第三系統伝本について検討した結果をまとめると、次のようになる。

(1) 第三系統の祖本は、第二系統の伝本ではなく、第一系統に属する佐野文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵本に近い伝本であつた。

(2) 第三系統伝本はすべて宣長が所有していた本から派生したと考えられてきたが、実際には、本居宣長記念館蔵本と同本を経て成立した一・二・三・五類本、石水博物館蔵本とその転写本からなる四類本の二つに大別される。

(3) 第三系統の最善本は、同系統の善本と見なされていた宣長所持本——本居宣長記念館蔵本——ではなく、より祖本に近い本文を持ち、誤脱も少ない石水博物館蔵本である。

第三系統伝本が『正三位物語』の名を冠されるに至つた理由は依然として不明ではあるが、佐野文庫蔵本（加藤千蔭旧蔵本）・静嘉堂文庫蔵本（和学講談所旧蔵本）は国学者に読まれていたものである。国学者達の間で両本と関わりの深い伝本が流布し、その中の一本が『正三位物語』と誤つた書名で伝えられ、第三系統の祖本になつたのであろう。

そこから、少なくとも柴田常昭所持本と青木茂房所持本の二本が派生し、それぞれを親本とする本居宣長記念館蔵本・石水博物館蔵本が成つた、という伝流の過程を想定できよう。

注

注1 「中世物語の基礎的研究——資料と史的考察——」風間書房、一九六九年。

注2 桑原氏の前掲書（注1）に記載がない伝本の分類は、稿者自身の調査の他に、広島平安文学研究会『石清水物語』伝本書誌

稿』（『古代中世国文学』第十九号、二〇〇三年六月）、中島正二「プリンス・トクガワ」の生母万里小路睦子の擬古物語書写活動について」（陣野英則・新美哲彦・横溝博編『平安文学の古注釈と受容第二集』武蔵野書院、二〇〇九年）も参考にし  
て行った。

注3 第三系統伝本内の第一〜第四類に関する詳細は、拙著『石清水物語の研究——第三系統伝本の校本と影印——』（新典社、二〇一四年）に記した。第五類の国文学研究資料館鶴飼文庫蔵零本は新出資料である。

注4 注1に同じ。

注5 注1に同じ。

注6 注1に同じ。

注7 大阪府立中之島図書館蔵本は、桑原氏によって名古屋市蓬左文庫蔵本の転写本と指摘されているため（同氏著前掲書）、比較対象としなかった。

注8 第二系統に属する彰考館文庫蔵本は、内閣文庫蔵一冊本の転写本であるため、参考資料に採用しなかった。

注9 市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成第二卷』（笠間書院、一九八九年）、前掲拙著（注3）等。ただし、『鎌倉時代物語集成』は、本居宣長記念館蔵本の影写本である射和文庫蔵本を善本としていた。

注10 青木茂房の入門、及び、柴田常昭の没年については、『本居宣

長事典』（本居宣長記念館編、東京堂出版、二〇〇一年）を参照した。

〔附記〕

一 貴重な資料の閲覧及び掲載を御許可いただいた所蔵機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

一 本稿は、同志社大学人文科学研究第18期研究会（京都と文化）第17研究会・JSPS科研費25330403「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」夏の研究集会（二〇一五年八月二三日於同志社大学室町キャンパス）、第42回古典研究会（二〇一五年一〇月四日於福岡大学本部キャンパス）における口頭発表に基づくものです。御教示を賜りました方々に、改めて御礼申し上げます。

一 本研究は、JSPS科研費JP26370221の助成を受けたものです。

（みやざき ゆうこ・九州産業大学国際文化学部准教授）